巻頭言

時代精神としての持続可能性

東京大学　サステイナビリティ学連携研究講座特任教授
住　　明正

持続可能な開発目標（SDGs）*）が国連で採択されたこともあり、最近は、持続可能性が世間の話題となっている。持続可能性という概念は、昔から水産資源の管理などの分野で存在した概念であるが、一般的に知られ始めたのは、1987年に発表されたブラントラント委員会の最終報告書（Our Common Future 邦題『地球の未来を守るために』）からであろう。その要点は、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」と言われている。これとても、開発の新しいやり方を考えるというように開発に力点を置くのか、次世代の負担を考えるという新しい考え方に力点を置くかによってその受け取り方が異なってくる。

いずれにせよ、現在は、閉塞感の漂う状況にある。その根本は、地球の有限性、あるいは、フロンティアの喪失にある。地球が無限であれば、常に、新天地が存在し、そこでは、過去のしがらみを離れ好きなようにできたはずだし、今のところで行き詰まれば、新天地で新たに再出発をすることが可能と思えたのであろう。つまり、場所を変えれば、今までのやり方で現状を打破できると夢が持てたのである。

しかしながら、昔を懐かしんでも仕方がない。今の地球の存在を前提として今後のことを考えてゆく必要がある。昔には、フロンティアがあったということは、言い換えれば、人間の存在が小さかったということである。それに比べて自然の力はものすごく、畏怖する存在でもあった。そのような状況では、すべてのことは自然が面倒を見てくれるのであり、全体的なことは自然に任せて、人間は目の前の問題にこだわり、対処するのみということであった。そこでは、人間は小さい存在であり何が起こるかわからないのだから、身を慎み危機に備える生き方をするしか仕方がなかったのである。ほとんどの宗教でも、道徳でも、贅沢を戒め、腹八分で過ごすことを教えているのは、そうしないとやっていけないからであった。

「このような状況は嫌だ、自然を克服し、勝手に振る舞いたい」というのが、近代を導いた精神であった。その結果として、科学技術は大きく進展した。しかし、人間社会の存在は地球環境に対して大きくなりすぎた。一人の人間が使用しているエネルギーはそれほど大きいとは思えなくとも、人類社会全体としての活動は、今の地球では賄いきれないほど

＊）持続可能な開発目標（SDGs）：
http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

の大きさなのである。ひとりの個人としては、それほどの贅沢はしていないと思っていても、食糧にも生活用品にも膨大な資源とエネルギーが社会としては費やされているのである。個々人の感じ方・考え方と、人類社会全体が及ぼす影響に関する印象が一致していないところに問題があるのである。

ゲームチェンジという言葉がはやってきている。あるいは、ルールチェンジともいう。今までは、勝利の条件とされた項目が、全く変わってしまい、今まで想像しなかったような勝利条件が課せられる状況のことでる。今までは、地球の資源を利用しつくして、廃棄物は自然に放棄して効率的に利益（カネとモノ）を最大化することが善であるという価値観にあった。しかし、現在は、ゲームのルールが変わったのである。地球は有限であるし、資源でもエネルギーでも上限があると考えざるを得ない。廃棄物の処理も循環を考慮して行わねばならないし、何よりも、将来に社会が破綻しないように、節度を持って行動しなければならない、つまり、持続可能な社会を作ってやっていくしかない、ということである。

では、どうするか？建前としてはわかるが具体的にどうするの？というのが多くの人の持つ疑問である。同時に、現代社会の行き着くところは、どこなのであろうか？という不安感も存在する。グローバル化とIOTにけん引されるイノベーションが新しい時代を作るといわれているが、現在の高度情報社会の行く末を誰も想定していないように思える。否、それぞれの人は想定しているかもしれないが、多数の支持を得ていないのであろう。ただ、現状で多数を得た見解が、実現するものでないことは歴史の教えるところである。

先は不透明とはいえ、科学的知見が提供する未来も存在する。例えば、現在の人類の活動が続けば、地球の環境容量をはるかに超えてしまう、ということである。問題は、このことは多数により支持されても、具体的な対応に関しては意見が分かれることであろう。人類や地球の将来という時には、個人の立場が捨象されているために、合意が成り立ちやすいのに対し、具体的な対応に関しては、現実に存在する個人の利害が表に出てくるからであろう。

持続可能性という旗印も、このような現在的な課題に取り組んでいこう、という世界各国の政治的な意思である。「誰一人置き去りにしない」というスローガンは、「誰かに犠牲を押し付けて自分たちだけが逃げきる」ことはしないというメッセージである。そこには、多くのテーマも含まれ、現実的な解決策も提案されていない課題も多い。しかし、逆に言うと、矛盾した課題を包み込むような旗印が、政治的な舞台では必要になる。具体的な取り組みに関しては、それぞれの条件を見ながら、試行錯誤的に実行してゆくことになろう。ただ、遠くの目標を眺めることによって、目先の変動にとらわれることがなくなることが重要である。

その意味でも、持続的可能性という言葉が広く受け入れられているのは、21世紀という時代を表す時代精神と思われる。